

## 時代への危機意識 大口玲子

「歌壇」（本阿弥書店）の一月号から毎号作品五十首が掲載されている。六人の歌人が、一年間で二回ずつ登場するというもの。（私もそのうちの一人であるが）歌数が多く、かつ歌集の編集のような時間を経てからの推敲や整理が加えられない分、作者が平素から思っていることや日常的な素の部分が作品になまなましく出でているようだ。読者としても実作者としても興味深く読んだ。半年間で六人の歌人が一巡したが、それぞれの五十首はどこか重苦しく、多く苦悽がにじんでいるように感じた。また、日常的・個人的な話題にとどまらず、現在の日本社会や時代の状況をそれぞれの問題意識でとらえた作品が目についた。

死の水が海に捨てられゆく秋のなぜにこんなに平穏なのか

吉川宏志「鳥の見しもの」（二月号）

つくづくと哀ふる土地の神にして紅葉の渓に踊るゆるキャラ

米川千嘉子「馬島」（二月号）

父の脚の銃創の痕想ひつつ行軍動画ネットに見をり

大塚寅彦「富嶽に問へど」（四月号）

・ウンギヨンさんやさしげなれどその祖父のその祖母の悲しみは終はらず

小島ゆかり「遠きひとり」（六月号）

吉川作は、原発事故の汚染水問題の異常を平穏な日常から照らし出す。米川作は、各地で盛り上がるゆるキャラブームに隠され

た問題を鋭く喝破する。パソコンでたぐり寄せる戦争の現場と肉親の体に刻まれた戦傷を結び合わせる大塚作。拉致問題を、国家ではなく家族の切実な問題として感受する小島作。危機意識が鮮明な一首をそれぞれ挙げたが、特に注目したのは水原紫苑である。未生なるわれの漬(け)し中国の少年あらむまた未生なる

水原紫苑「きさらぎやよひ」（五月号）

- ・水晶のさくらあらむか夜と霧のいや果てまでを咲かむとすらむ
- ・沖縄戦なかりせばたまきはるわれ生れざらましを死なざらましを
- ・われ在らず沖縄戦なくヒロシマ・ナガサキ無き世界こそ在らまほしけれ

・さくらばなどまらざらむ憲法の恣意解釈のきりぎしに舞ふ時間と空間をこえて自由に往還する「われ」は、生まれる前に自らの加害行為を確信している。また、水原がその著書『桜は本当に美しいのか』で緻密に検証し、ばらばらに解体した桜のイメージを、ナチス・ドイツのユダヤ人迫害にびつしりと重ねた作品も鮮烈である。沖縄戦の歌には「母の兄、沖縄戦に死す。長女なりし母は戦後、失業したる元近衛士官の父を迎へて、名も無き家を守る」と詞書がある。沖縄戦が自身の出自に影響を与えていたという意識は、ひるがえつてみずからの存在を激しく否定し、自分の存在とひきかえの絶対性を持つて沖縄戦や原爆投下を否定する。最後の「とどまらざらむ」は馬場あき子の歌を思わせつつ序詞として働き、現政権の憲法解釈の際限のない危うさをあらわにする。戦争への激しい憎悪が歌われたこれらの作品に、前出の著書のあとがきでもはつきりと述べられていた、水原の覚悟を思う。